

—縮尺模型による検討—

奈良女大家政

○伊藤敬子 梁瀬度子 磯田憲生

目的 室内の雰囲気を心理的に評価する場合、照明は非常に大きな影響を及ぼす要素である。既往の研究¹⁾を基に検討した結果、在室者の視線付近及びそれ以下の部分における輝度と心理評価との相関が高いことが明らかになった。そこで本研究では、局部照明を併用することによって作り出される室内の明るさ対比に焦点をあて、その心理評価に及ぼす影響について明らかにすることを目的とする。

方法 住宅居間の10分の1縮尺模型を評価対象として実験を行った。照明要因として、全般照明・局部照明の明るさ、光源の種類及び局部照明の位置を取り上げた。全般照明には蛍光灯と白熱灯の2種類を用い、室中央机上面照度を30lx, 100lx, 150lx, 300lxの4段階とした。局部照明には白熱灯を用い、左側壁面の中央で高さを3段階変化させた。これらの組合せにより、室中央机上面照度を30lx, 150lx, 300lx, 500lxに設定した。合計39通りの照明条件の縮尺模型を順次呈示し部屋全体のイメージを20対の形容詞についてSD法の7段階評定で把握した。被験者は、住居学科学生41名である。

結果 SD法によって得られたデータを分析した結果、照明要因に基づく室内雰囲気の因子構造として、活動性因子・価値因子・力量性因子の3因子が抽出された。変化要因のうち局部照明（高輝度部分）の位置は力量性因子に強く影響しており、室内の明るさ対比の度合は活動性因子に影響していることが明らかになった。局部照明を併用することによって空間に力量感を与えられ又室内の明るさ対比が大きくなるほど活動性が高くなる傾向がみられる。

文献1) 長岡真実子, 三浦浩美: 住宅居間における天井照明の心理的影響に関する実験的研究, 卒業研究, 1985